

棕の道草 第32回

「古九谷の深むらさきも雁の頃」 細見綾子

近藤英子

古九谷は九谷焼の中でも、江戸時代前期の創生期から一時途絶えるまでの五十年ほどの間に作られたものをいい、明治時代に再興された、きらびやかな金欄手や細密な色絵磁器とは区別されている。

古九谷には、松や牡丹、鳳凰といった力強い絵柄とともに、緑黄紫を主張色とした釉薬の濃い色づかいのことが多い。緑や黄に注目する人が多いなか、地味な紫に心を止めたことに非凡さを感じる。この濃い紫を「深むらさき」と表現しているのも絶妙である。この句には金沢にてという前書きがあるが、金沢は綾子が新婚の頃から十年余り住んでいた地であり、夫沢木欣一と俳誌「風」始めた地でもある。北方から雁が渡ってくる十月半ばは、野には白銀の芒の穂がたなびき畑には落穂が残っていて、夜は月が美しい。表題の句は北陸の秋の深まりを古九谷の紫と雁で描いて、しみじみとした味わいのある一句になっている。

くれなゐの色を見てゐる寒さかな

『冬薔薇』所収

柚子煮詰む透明は喜びに似て

『伎藝天』所収

吾亦紅ぼつんぼつんと気ままなる

『牡丹』所収

細見綾子の句は、日常生活のひとこまを淡々と詠みながら、鋭敏な五感で対象の本質をズバリと捉え、読後に深い余韻を残す。具象的でありながら感覚的、素朴でありながら情感豊かな綾子の句は、時を経ても少しも色あせることがない。